

郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。
阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

朝鮮賛美の画伯

加藤 松林人



加藤 松林人

加藤松林人は明治31年（1898）9月16日、那賀郡桑野村中分（現阿南市内原町）に、父・安三と母・ミツヲの長男として生まれた。本名は檢吉。雅号は松林人・松林・小林人・小琳人などと名乗った。
大正4年（1915）徳島県立富岡中学校（現在の富岡西高校）を卒業し、大正6年8月に、長野県松本市元町の小林邦八の四女・

なつと結婚し、同年9月、早稲田大学文学科予科を修了している。
大正7年、20歳のとき、父の仕事の関係で、朝鮮の京城（現ソウル）へ移住し、同年9月に長男良一が誕生したが、2カ月後、流行性感冒により死亡している。

大正9年、京城の画家、清水東雲（四条円山派の森寛齋門下）に入門し、東洋画の手ほどきを受け修練を重ねて、風景や生物、庶民の生活を描き、独自の境地を拓いていた。

大正11年（1922）第1回朝鮮美術展に風景画の2点が入選したのを皮切りに、1年後の第2回朝鮮美術展では「黒扇」が三等章を受賞し、宮内省の買い上げとなり、第4回展では「室内の春」が特選になるなど着実に実力をつけていった。

日本の帝国美術展覧会（帝展）でも、昭和2年と同5年の2回入選したが、以降は日本内地での展覧会には出品せず、朝鮮での活動に専念した。

一方、大正12年、母・ミツヲが死去。昭和4年、妹・花実死去。昭和7年、父・安三死去と、家族の不幸が続いた。

昭和10年、第14回朝鮮美術展において推薦され、無鑑査となり、昭和16年の第16回朝鮮美術展では参与、審査員となって、朝鮮画壇で不動の地位を築き上げ、朝鮮美術会の中心的存在となった。

昭和20年（1945）太平洋戦争の終戦により、全てを放棄して日本へ引き上げ、父・安三の実家である那賀郡桑野村の垣内博記方に滞在した。

戦後は、日本の中央画壇とは交渉を持たず、韓国系の誌紙に執筆しながら、朝鮮学会や日韓親和会に参加する。

また、岩波文庫の「朝鮮民謡選」、「朝鮮音容選」のカットを描いている。

昭和38年（1963）、韓国政府公式招待日本人第1号として、作家、小田 実と共に招待された。

昭和58年、滋賀県大津市で死去。（享年84歳）

朝鮮在住30年間に、朝鮮八道の各地を写生旅行し、朝鮮半島の美しい風景や庶民の生活を優しい色合いで描いた作品は、遺族から阿南市へ寄贈され、市の貴重な財産となっている。平成22年（2010）には、韓国文化院からの要請

により、東京都の韓国文化院ギャラリーにおいて、「韓国をこよなく愛した加藤松林人展」が開催され、日韓文化交流の礎を築いた一人として紹介された。

参考資料

「阿南市の先覚者たち 第二集」
2014・阿南市文化協会

今回は、民主的医療運動の先駆者「大栗清実」を紹介します。



華城八達門



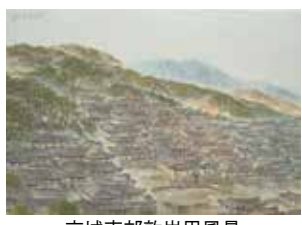
朝鮮時代風俗(花売り)



田園



石



京城東郊敦岩里風景